

『金剛頂經』降三世品における降三世と明王について

宮坂 宥峻

0 はじめに

『金剛頂經』¹⁾は四大品と流通分とによって構成されている經典である。降三世品は四大品の中、金剛界品の次に説かれる金剛部の章であり、十種の曼荼羅儀軌を説く。日本伝来の金剛界九会曼荼羅にはその一部が画かれている。降三世品の曼荼羅の特徴として、金剛界品の現図曼荼羅における金剛薩埵の位置が降三世明王として画かれている。²⁾

伝統的にこの位置は「降三世明王」とであるとされ、降三世品の主尊もまた降三世明王であると理解される。しかし厳密に經典を見る上で降三世品の主尊は金剛手菩薩であり、「降三世」という単語を尊格の名称として説いていない。また「明王」という尊称も主尊に対して用いてはいない。

本稿では『金剛頂經』における「降三世」と「明王」について考察し、降三世品の主尊が如何なるものであるか明らかにしたい。

1 降三世品の概要

降三世品の梵題は“Sarvatathāgatavajrasamayo nāma mahākālpārājah”である。降三世品における十種の曼荼羅儀軌のうち、主に物語が説かれるのは「降三世大曼荼羅広大儀軌」³⁾と「三世輪大曼荼羅広大儀軌」⁴⁾である。今回は金剛界九会曼荼羅にも含まれている「降三世大曼荼羅広大儀軌」を中心に考察していく。先ずこの儀軌の構成は次の通りである。

- [一]最勝曼荼羅王の三摩地
- [二]図絵曼荼羅と入壇作法
- [三]悉地智
- [四]四種印智
- [五]諸儀則類

儀軌によって多少の差違はあるが、降三世品に限らず四大品では概ね同様の構造をしている⁵⁾。このうち物語が説かれるのは[一]最勝曼荼羅王の三摩地である。

これを更に細分化すると次の通りである。

- (1)〔百八名勧請〕
- (2)〔金剛手の変現〕
- (3)〔大自在天と論争、終命〕
- (4)〔諸天の降伏〕
- (5)〔大自在天の救済、降伏〕
- (6)〔三界諸天の入壇灌頂〕
- (7)〔諸鬼等の降伏〕

その内容は、金剛手菩薩が一切如来によって勧請され、忿怒の相をとるものとなり、剛強難化の諸天等を降伏するというものである。特に自身を「三界主宰 (trailokyādhpati)」と称する大自在天と対峙する様子が中心となって説かれている。大自在天は金剛手に三宝帰依するように促されるも拒み続け、最終的には心真言によって地に伏するものとなって降伏される。この時の真言は、現行の次第にある降三世明王の大呪として知られているものである⁶⁾。その後、大自在天は蘇生され三宝に帰依するものとなり、灌頂を受けて曼荼羅に入る。大自在天を除く諸天の降伏も、省略的ではあるが概ね同様である。また三世輪大曼荼羅儀軌における物語は、降三世大曼荼羅儀軌の続きから説かれるのではなく、大自在天を蘇生する様子を再説する箇所から説かれている。

降三世品の物語の大本になっているのは、『*Vāmanapurāṇa*』や『*Devīmāhātmya*』といったインド神話を逆転したものであることは既に周知の通りである。⁷⁾

以上が降三世品の概要である。簡略ではあるが、やはりこれらの中において主尊が「降三世明王」は疎か、「降三世」とも「明王」とも呼称されることはない。しかし、品題が降三世品である以上、『金剛頂経』において「降三世」たるものが如何なるものであるか、また「明王」についても明確にしなければならない。

2 主尊の変現と尊容

次に降三世明王と目される主尊の金剛手菩薩についてみていく。仏教史における金剛手の起源や変遷については既に多くの研究なされているため⁸⁾、ここでは降三世品における金剛手の様相についてみていきたい。

まず、最初に百八名をもって勧請されるのは “Sarvatathāgatamahācakravar-

tin”という名称の尊格である⁹⁾。内容からこの尊格が金剛手であることは確かであり、金剛手には転輪王としての特性も併せ持つことが伺える¹⁰⁾。

勧請を受け終わった金剛手は大自然を降伏するにあたり、一切如来の心真言に応え、忿怒の相をした執金剛として出生する。ここで用いられる一切如来の心真言は、現行の次第における降三世明王の小呪の基となっているものである¹¹⁾。出生した金剛手の様相を次のように説かれている¹²⁾。

この心真言が出るや否や、金剛手の心金剛から実にかの世尊持金剛は、普く光焰を有し、眉間に皺を寄せ、眉を顰め、額に皺を寄せ、怖しい牙で畏怖する面にして、金剛の鉤・剣・索など、金剛火焰に照らされた武器を手にし、種々の色の装飾と種々の衣服を身に纏った金剛手の姿を生じ…

このように忿怒の相をとり降伏に赴くのである。また図絵曼荼羅の段において金剛手を次のように画くよう説かれている。¹³⁾

その中央に大薩埵である金剛手を画くべし。大青蓮華を好むものであり、金剛のように堅固なフーンという怒りの声を発するものであり、怖ろしげな牙を口から出すものであり、忿怒と笑の面をもつものであり、弓を射る姿勢が完全なものであり、輝く焰を放つものである。

左足は踏み出しそれによって大自然を踏み、右足は烏摩後の胸に置くように描くべし。

降三世明王の尊容には幾通りかの種類があることは周知の通りであるが、これらの記述によれば、三面以上あり、弓を射る姿勢ということから弓を持っていること¹⁴⁾、焰を放つか若しくは背負っていること、大自然と烏摩后を踏んでいること等が確認することができる¹⁵⁾。現図の降三世大曼荼羅と画かれる位置の違いはあるものの、金剛手に相当する尊格においては、経典と粗一致する尊容が画かれている。

胎藏曼荼羅の持明院においても「降三世尊」が画かれているが、金剛界のように何者かを踏む姿ではない。後にも触れるが、金剛界の金剛手と胎藏曼荼羅の降三世尊を同一の尊格であると解釈してしまうのは些か問題があろう。

では、果たして『金剛頂經』の降三世とは如何なるものであるか探っていきたい。

3 降三世(Trilolavijaya)の解釈

次に『金剛頂経』における「降三世」について探っていきたい。先述したように、經典中において金剛手が降三世(Trilokavijaya)とは呼称されない。しかし品題が「降三世品」である以上、「降三世」は当然經典中に説かれており、その用例として次の二点があげられる。

例1 図絵曼荼羅¹⁶⁾

idaṃ sarvatathāgatamahāvajrasamayabhūtaṃ/
trilokavijayaṃ nāma mahāmaṇḍalam abhāṣat//

例2 四種印智¹⁷⁾

bāhuvajraṃ samādhāya kaniṣṭhāṅkuśa bandhitā/
trilokavijayā nāmā tarjanīdvayatarjanī//

例1は曼荼羅の名称として、例2は印契の名称として“trilokavijaya”が用いられているのである。このように經典中において「降三世」は、曼荼羅や印契の名称としては説くものの、尊格の名称としては説かれていない。

そもそも降三世“trilokavijaya”とは何であるか。“trilokavijaya”という単語は、triloka/vijayaの複合語で成り立っている。“vijaya”という語は√jiから派生した語に接頭辞vi-が附属したもので、「打ち勝つこと」「破壊すること」等を意味し、漢訳においては「降伏」と訳するのが一般的である。何に打ち勝ち破壊するのかと言えば、それは三世であるが、果たして「三世」とは何であるか。

3-2 三世の解釈

經典の内容からして、降伏されるのが大自在天を始めとする諸天であるからして、「三世」がそれらを示すことは明らかである。經典中において大自在天は自身を「三界主宰(trailokyādhīpati)」¹⁸⁾と称していることから相違ない。

では、大自在天を主宰とする「三世」とは何か。一般的に「三世」と言えば過去世・現在世・未来世のことであるが、漢訳では「三界」と訳すことも多く、それでは欲界・色界・無色界を指すことになり、大きく意味が異なってくる。經典中においてその何れであるかを探ることは困難であるが、『金剛頂経』の註釈書の一つであるŚākyamitra 著の『Kosalālamkāra』には次のような解釈を行っている。¹⁹⁾

『金剛頂經』降三世品における降三世と明王について（宮坂）

「三世」と説いているのは、世間的な相として、地下世間と地上世間と天世間であり、それが三世である。その三世自体において三世の主と成っているものであるから三世主であり、地下世間の主は帝釈天と毘紐天である。地上世間の主は大自在天である。天(世間の主)は梵天である。

この釈によれば、三世とは地下・地上・天の三つの領域であるとしている。またそれぞれの主(adhipati)として地下の主は帝釈天と毘紐天、地上の主は大自在天、天の主は梵天であるとしている。あまり馴染みのない解釈であるが、この三世を地下・地上・天とする説明は、Candra Das “*TIBETAN-ENGLISH DICTIONARY*”²⁰⁾や『格西曲札 蔵文辞典』²¹⁾など辞書類においても、典拠は記されていないものの同様の説明がされており、一応は通説のようである。『格西曲札 蔵文辞典』では、他にも「三世」「欲界・色界・無色界」であるとも説明している²²⁾。

また経典は異なるが、降三世尊を説く『大日経』²³⁾の註釈書である『大日経疏』には次のような解釈がされている。²⁴⁾

所謂三世者。世名貪瞋癡。降此三毒名降三世。又由如過去貪故今受此貪報之身。復生貪業受未來報。三毒皆爾。名為降三世也。

復次三世者名為三界。謂毘盧遮那如來。始從有頂迄至下地。從上向下相次。一天處皆化。化無量眷屬大天之主。今勝彼天百千萬倍。彼怖未曾有。更有何衆生而勝我耶。乃至以法而降伏之。即次第而下。以能降伏三世界主故。名降三世明王也。

この中では降三世に対して二つの解釈が示されている。一つは三世を三毒と置き換えるものであり、もう一つは三世を三界と解して有頂から下地に至るまでの天處を化して、三世界主を降伏する故に降三世明王であるとするものである。

一つ目の三毒とし、これを降伏する故に降三世とする解釈は一般的にも広く知られているものである。しかし飽くまでこの解釈は『大日経』に依るものであるから、そのまま『金剛頂経』の降三世に当てはめてしまうのは早計である。そもそも『金剛頂経』において、金剛手が三毒を降伏するという場面は説かれていない。尤も大自在天そのものが三毒の顕現であると言えなくもないが、『大日経』とでは尊像・真言・種子など異なる点が多い。

二つ目の三世を三界とする解釈であるが、先の辞典にもあるように三世は三界とも訳せる。事実、施護訳では“triloka”の訳が「三世」「三界」と混同しており、特に区別しているようには見受けられない。「有頂より下地に至るまで」や「三

世界主を降伏する故に降三世明王とする」とあるが、『大日経』に「三世界主」は説かれておらず、『金剛頂経』の内容に則したものであろうと推測される。何故『大日経』の註釈書に『金剛頂経』に即した説明がされているのかと言え、口述者である善無畏三蔵が『金剛頂経』にも精通していたことが理由としてあげられる。

以上、三世の解釈を見てきたが、それらをまとめると少なくとも四種の解釈があると考えられる。

- (1). 過去世・現在世・未来世
- (2). 欲界・色界・無色界
- (3). 貪・瞋・癡
- (4). 地下・地上・天

この何れかの主宰が大自在天である。先ず(1)であるが、これは時間軸のことであるが、大自在天がそれを超越している主宰としてあり得るのか。(2)について、大自在天は色界の主であるとされるが、果たして欲界と無色界も含まれるのか。(3)については先述した通りである。

結論として降三世の「三世」とは、『Kosalālamkāra』にある[地下・地上・天]とするのが最も適した解釈であると考えられる。消去法であり、確証的な資料が多くあるわけではないが、『金剛頂経』の註釈書の釈であることから、最も有力として考えられる。よって『金剛頂経』の「降三世」というのは「[地下・地上・天]の主宰である大自在天を降伏する」と解釈するものである。

4 明王(Vidyārāja)の解釈

先に述べたが、『金剛頂経』降三世品の主尊である金剛手は「降三世」とも「明王」とも尊称されていない。では何故、降三世品の主尊が明王であると理解されているのか。

現在、一般的に明王と言え、尊格の種類として如来・菩薩・明王・天という四つのグループに分けられたものの一つとして考えられている。その明王としての尊格群が成立するための条件として頼富本宏氏は次の四つの条件を挙げている。²⁵⁾

- (1). 特定の真言・陀羅尼を持つこと。
- (2). 威力を表すために原則として忿怒尊であること。

『金剛頂經』降三世品における降三世と明王について（宮坂）

(3). 特定のヒンドゥー尊を降伏すること。

(4). 仏教のある尊格の化身であること。

また、これらの条件は一つの尊格にすべて完備されているわけではないが、少なくとも二つの条件は満たしているとしている。この条件のもと、『金剛頂經』の金剛手は如何であろうか。

(1). については、降三世の真言として先述した大呪と小呪の心真言があり、現行の次第類においても広く普及している。そもそも密教の尊格においてその殆どが真言陀羅尼を有していると言ってもよい。(2). については先述したように、金剛手は降伏するために忿怒の相をとり出生している。(3). については周知の通り大自在天はシヴァ神のことである。図絵に関して言えば烏摩后も降伏している。他にも經典中において金剛手に降伏される諸尊には、ヒンドゥー教を代表する神々が多くいる。(4). については、金剛手は忿怒の相をとり、三面六臂、若しくは四面八臂となる。尤も經典に忠実に沿った場合、菩薩から明王となる記述はない。

以上の条件に『金剛頂經』の金剛手は粗全てに該当する。しかし明王の成立条件であるのに「明王」と呼称されないということである。つまり金剛手が明王になるとされるのは『金剛頂經』以後ということになる。

しかしここで一つ注意しなければならないのが、『金剛頂經』において「明王」と呼称される尊格が全く存在しないのではなくして、別に存在しているということである。それは次の通りである。²⁶⁾

tad yathā Maheśvarāya Krodhavajrah/Nārāyaṇāya Māyāvajrah/
Sanatkumārāya Vajraghaṇṭah/Brahmaṇe Maunavajrah/
Indrāya Vajrāyudhaḥ/iti vidyārājanakāḥ ity abhiṣiktāḥ//

これは金剛手が降伏した諸天の内、大自在天を含む三界の主宰らに金剛名灌頂を与える場面である。その灌頂名として「明王(Vidyārāja)」が説かれているのである。このように『金剛頂經』において明王という尊格は、主尊ではない異なる位置に確立されている。またこれらの明王は「明王成立の四条件」には当てはまらない。乃ち、現代における明王の理解と『金剛頂經』における明王とでは解釈に違いがある。

仏教史における明王の成立過程の全ては必ずしも明らかとなっていない。漢訳圈における『菩提場所説一字頂輪王經』や『蕤呬耶經』においては真言の偉大性

を表す言葉として「明王」が用いられている²⁷⁾。またそれらが忿怒尊の真言として用いられていることは注目される。『蘇悉地羯囉經』²⁸⁾においては「明王」を尊格として捉えられており、この時点では既に明王が尊格として確立している。

またインドにおいて、特殊な明呪を持つ者(Vidyādhara)を崇める呪力信仰があり、その王者(rājan)が明王であるという。胎藏曼荼羅において持明院に属する不動尊や勝三世(降三世)が明王となるのはこの影響があるからであろう。尤も両尊とも『大日經』においては「明王」とは尊称されず、『大日經疏』において「明王」が付されるようになる。

しかし『金剛頂經』における明王(三界主)の位置は、これらの展開とは異なった不規則なものである。頼富氏は明王にも多様性があるとされているが²⁹⁾、『金剛頂經』においては三界主の灌頂名として明王が確立している以上、それを降伏した主尊の金剛手が同じ明王とはならない。

後の時代の解釈として、『金剛頂經』に説かれる金剛手が菩薩から明王となることは確かであるが、忠実に經典を解釈した場合には明王という尊格に注意を払わなければならない。

5 結びとして

以上、降三世品における「降三世」と「明王」の考察を試みてきた。降三世曼荼羅の主尊を伝統的には降三世明王とするが、原典にあたり探った場合、厳密に言えば降三世明王という尊格は説かれない。

「降三世」に関しては、經典中、曼荼羅や印契の名称として用いられるのみである。また「三世」に様々な解釈がある中で、少なくとも『金剛頂經』に限っては[天・地上・地下]の三つの領域のことであり、その主宰として大自在天を指すものである。

「明王」に関しても、『金剛頂經』においては三界主らの灌頂名として確立されており、主尊が明王としては成りえない。

尤も『金剛頂經』成立後の解釈、特に中国以降において降三世品の金剛手菩薩が降三世明王となり、且つ降三世曼荼羅の主尊が降三世明王であるという伝統的解釈に異論を挟むものではないが、『金剛頂經』という原典解釈においてのみに言及するならば、やはり「降三世明王」という名称の尊格は説かれていない。

最後になるが、何故降三世品の主尊が降三世明王として理解させるようになって

たのか。

品題と主尊の関係について言えば、一切義成就品を挙げることができる。「一切義成就」という名称は金剛界如来(大日如来)の前身である「一切義成就菩薩」として明らかに尊格として登場する³⁰⁾。しかし同一の名称を持つ一切義成就品に一切義成就菩薩は登場せず、主尊も虚空蔵菩薩である。一切義成就品の品題“Sarvārthasiddhi”は「一切義成就菩薩の章」ではなく、あくまで内実に沿って「あらゆる利益を獲得する章」と解釈されるべきであり、品の名称がそのまま主尊の名称へとは結びつかない。降三世品も同様である。主尊はあくまで金剛手菩薩であり、品題“Trilokavijaya”も「降三世明王の章」ではなく、内実に沿って「三界主である大自在天を降伏する章」と解釈するべきである。曼荼羅や印契の名称としての「降三世」も同様に解釈される。

後の解釈において降三世明王として取り上げられるようになったのは、やはり『大日経』において降三世が尊格として説かれ、『大日経疏』においては降三世明王として解釈していることが要因として考えられる。降三世品はそれに影響を受け、同名の品題であったことから主尊が降三世明王になったと推測される。

註

- 1) “*Sarvatathāgatatattvasaṃgrahaṃ nāma mahāyānasūtram*” 所謂『初会金剛頂経』を指す。
- 2) 現図曼荼羅においては金剛薩埵の位置(東方輪西方)に、經典に沿えば阿閼如来の位置(東方輪中央)に画くことになる。
- 3) “*Trilokavijayamahāmaṇḍalavidhivistarāḥ*” (堀内寛仁『梵蔵漢対照 初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇(上)』密教文化研究所, 1983, §619～ 以下「§」記号。)『大正蔵』18. No. 882 p. 369c～.(施護訳では「曼拏羅」と漢字表記されるが、本稿においては「曼荼羅」とする。)
- 4) “*Trilokacakramahāmaṇḍalavidhivistarāḥ*” §1206～『大正蔵』18. No. 882 p. 382a～.
- 5) 三世輪第曼荼羅儀軌では[四][五]を説かない。他の儀軌では[四]までを説く。
- 6) “oṃ Śumbha Niśumbha huṃ gr̥ṇa gr̥ṇa huṃ gr̥ṇāpaya huṃ ānaya hoḥ bhagavan vajra huṃ phaṭ//” (§656.)
- 7) 主に女性神を称えたもので、シヴァ神(大自在天)の妻であるパールバティ(烏摩后)によって、アスラのスンバ・ニスンバの兄弟が倒されるという物語である。降三世品では、金剛手がスンバ・ニスンバの心真言を用いて降伏する。

- 8) 梅尾詳雲「金剛薩埵の前身としての金剛手の研究」(『梅尾詳雲全集第Ⅴ巻 理趣經の研究』、1982)、神林隆乗「金剛手菩薩」(『密教』1-2, 1910)、頼富本宏「金剛薩埵図像の覚え書き」(『密教図像』1, 1982)、山野智恵「初会金剛頂經における金剛手—金剛手の出現」(『智山学報』46, 1997)、同「金剛手の変遷」(『智山学報』47, 1998)等。
- 9) §619. 漢訳は「金剛手」が補われている。
- 10) 『金剛手灌頂タントラ』(D. No496)「曼荼羅建立儀軌」において、曼荼羅の中央(中尊)が、“hkor los sgyur ba”とあり、金剛手との関連について興味深い記述がある。
- 11) “om niśumbha vajra hūṃ phaṭ”(§683.)
- 12) §651～
- 13) §867～869
- 14) 堀内本の註記にも記されているが(p390.)、“pratyālīdha”とは「弓を引く姿勢」のことである。漢訳では「拳金剛歩善妙相」(T18. No. 882 p367c.)。
- 15) 大自在天のみならず烏摩后まで踏む尊像を画くのは、やはりインド神話を意識した章であることが伺える。
- 16) §848.
- 17) §947.
- 18) §670, 675..
- 19) Śākyamitra; “*Kosalālamkāratattvasaṃgrahatīkā*” (D. No2503, yi. 190a.)
‘jig rten gsum zhes btags pa ni ‘jig rten pa’i tshul gyis sa ‘og gi ‘jig rten dang/sa
steng gi ‘jig rten dang/lha’i ‘jig rten de ‘jig rten gsum mo/’jig rten gsum po de
nyid na ‘jig rten gsum gi bdag por gyur pas na ‘jig rten gsum gyi dban po
ste/sa ‘og gi ‘jig rten gi dbang po ni brgya byin dang khyab ‘jug go/sa rteng gi
dbang phyag chen po’o/lha’i yul gyi tshang pa’o/
- 20) *TIBETAN-ENGLISH DICTIONARY*, Candra Das、臨川書店、1969。
- 21) 増補改訂版『格西曲札 蔵文辞典』(民族出版社、1967)
- 22) 聞くところによると、インド文学においては「天・空・地」の三つの領域を指すことがあるという。
- 23) 『大正蔵』18. No. 848
- 24) 『大正蔵』39. No. 1796 p. 685b.
- 25) 頼富本宏「インドの明王像—とくに集合明王像の成立に関して—」(『明王の図像』仏教美術研究上野記念財団助成研究会、1996)を始めとする頼富氏の明王に関する論書。
- 26) §746、漢訳の該当箇所は以下の通りである。(『大正蔵』18, p. 373a.)
其名曰大自在天号忿怒金剛。那羅延天号幻化金剛。童子天号金剛鈴。梵天号

『金剛頂經』降三世品における降三世と明王について（宮坂）

寂默金剛。帝釈天号金剛器仗。如是等五。即金剛灌頂明王。

27) 『大正蔵』 18. No897, p. 763a.

輪王佛頂一字真言。是其佛部明王。高頭大尊十字真言。是蓮華部明王。

嚩婆忿怒其彼真言有呬發字。是金剛部明王。其軍荼利尊通是三部明王。

『大正蔵』 19. No950 196c.

秘密主此明王。能生不思議威德。

28) 『大正蔵』 18. No893. 「無能勝明王」(p. 625a.)、 「馬頭明王」(p. 627c.)等、漢訳では尊格として「明王」が訳されている。しかし蔵訳(D. No807, wa.)における “rig sngags rgyal” (明王)は尊格か明呪であるかの判断が難しい。「馬頭明王」の箇所では “rig sngags rgyal dang rta mgrin dang” (明王と馬頭と)と並列に訳されている。

29) 「五大明王の成立と展開」(『山崎泰廣教授古稀記念論文集：密教と諸文化の交流』永田文昌堂、1998)p. 238.

30) §18～.

〈キーワード〉 金剛頂經、真実摂經、降三世、明王、曼荼羅、主導